

イトウと共生するまちづくりを目指して (前編)

本号では、イトウの基礎情報と全道的な生息状況及び、イトウ個体数の減少要因についてご説明します。3月号では、本町に生息するイトウの保護や環境保全の必要性、豊かな自然環境を教材とした環境教育をご紹介します。



オス(手前) メス(奥)

○イトウの基礎情報

イトウはサケの仲間、国内最大級の淡水魚です(写真1)。過去に210cmのイトウが捕獲された記録があります。イトウは「幻の魚」とも言われ、環境省のレッドリストでは、絶滅の危険性が高い種(近い将来、野生での絶滅の危険性が高い種)に指定されている希少種です。食性は体長20cm前後までは水生昆虫を、それ以降は主に魚を食べます。また、時にはネズミなどの小動物も食べます。肉食性の魚で、河川内食物連鎖の頂点に位置する捕食者です。成熟年齢はオスが4から6歳、メスが6から8歳です。産卵は在来のサケ科魚類で唯一春に産卵をします。メスは一度の産卵で平均5千粒ほどの卵を産みます。



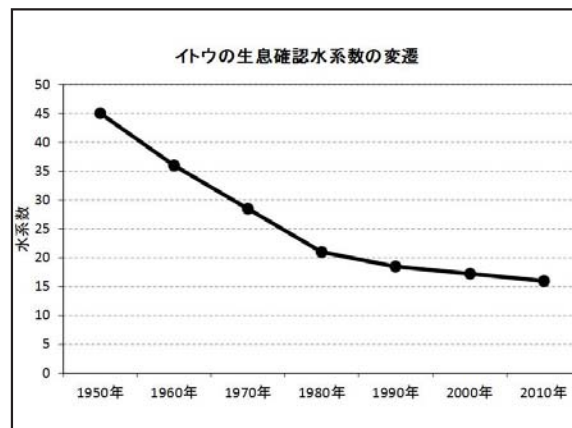
写真1

寿命は20年前後で、一生のうちに数回の繁殖を繰り返します。

○イトウの昔と今

本町にはイトウが比較的多く生息していますが、全道的に見ると近年、「幻の魚」と言われるほど個体数が減ってしまいました。

昭和25年以前は北海道を中心に全国で45水系に生息していました。ところが、昭和35年代には36水系、55年代には21水系と、ここ60年の間に急速に数が減ってきました(左グラフ参照)。最近の調査でイトウの生息(繁殖)が確認された水系は道内16水系です。このうち個体数が比較的多い水系は、わずか5水系です。



○なぜイトウが減少したのか?

【イトウの減少要因】

- ① 生息地の破壊と分断
- ② 産卵期を狙った捕獲
- ③ 外来種の人的移入
- ④ 水質汚染

以上が減少要因として挙げられます。

このうち①生息地の破壊と分断が最大の原因です。次のIからIIIでは生息地の破壊と分断による影響を、IVでは産卵期を狙った捕獲がなぜダメなのかを説明します。

I 移動の障害と産卵場所の減少・消失

イトウの成魚は主に、川の中流域から下流域・湖沼・海に生息しています。産卵期になると川を遡って上流域で産卵します。川にダムや砂防ダム、堰堤が出来る産卵適地まで行くことが出来ません(写真2)。



イトウの産卵適上の妨げとなる落差工 写真2

また、産卵は直径5cm前後の砂利が堆積する場所で行われますが、堆積する砂利が粒子の細かい泥や砂などで埋まってしまうと卵を産むことが出来なくなりません。または、仮に産んだとしても孵化率が低下してしまいます。

II 稚魚の生息環境の減少・消失

イトウの稚魚は遊泳力が弱いので、流れが穏やかで、かつ身を隠すための落ち葉や倒流木などのカバーが豊富に点在する氾濫原(写真3・写真4)のような環境が必要です。コンクリート護岸や川の直線化をすると、稚魚の生息環境が失われてしまいます。



イトウ稚魚の生息環境 写真3



写真4

III エサ資源の減少・枯渇

イトウは河川内食物網の頂点に位置する魚です。このためエサとなる水生昆虫や魚が豊富に生息している必要があります。前述のように、イトウは稚魚から成魚までの各成長段階に際して多様な環境を必要とします。イトウの生息環境がなくなるといことは、同時に他の生物の生息環境もなくなってしまうことを意味します。

IV 繁殖期における成魚の捕獲

一時期、大型イトウの剥製が高額で売買されていた時期があります。このことから、捕獲効率の高い繁殖期が狙われていました。

IIIで述べた通り、イトウは最高次の捕食者です。このため、他の魚類に比べて個体数が元々少ない魚です(図1参照)。

1匹のメスが1回産卵をして、産まれた子供が卵を産める年齢に達するこ

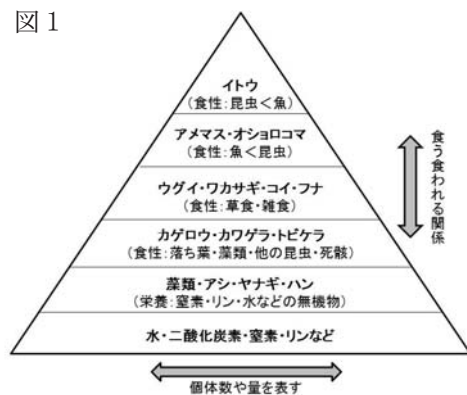


図1

とのできる数は、自然条件下で0から3匹程度です。このため、個体数が減ってしまうと元の個体数に回復するのは容易ではありません。イトウは子孫を残す確率が低い魚と言えます。産卵を終える前の個体を捕獲してしまうと子孫を残す確率をさらに低下させてしまいます。

また、最近ではイトウ資源保護の観点から道内各地でキャッチ&リリースが定着しつつあります。しかし、繁殖期においては、リリースしても正常な産卵行動を行わなくなる傾向があります。このことは、卵の受精率低下や孵化率低下を引き起こす可能性があります。

確実に産卵をさせてあげることがイトウを減らさないための条件の一つです。(後編へ続く)